



グローバル -glocal【ぐるーかる・名】
グローバル (global: 地球規模の、世界規模の)
と、ローカル (local: 地方の、地域的な) を
かけ合わせた造語。

編集後記

今回「グローバル静岡」をテーマにインタビューや記事を作成して、静岡に住む外国人の現状や問題、私たちグローバルコミュニケーション学科の学生がすべきことなど、改めて深く考えるきっかけとなりました。今後はこの経験を生かし、少しでもグローバル静岡に近づけるよう励みたいですね。

山本佳奈



この授業ではインターナショナルスクールに行き、インタビューをし、それを記事にまとめるという活動をしました。私がやったのは生徒へのインタビューです。そこでの大変だったことは、生徒の方たちが日本語を学んでいるとはいえ、早く喋られることや難しい言葉に対応できないことです。自分たちがわかりやすくしているつもりでも相手にとっては難しくなっていることに気がつくことができませんでした。しかしフレンドリーな人が多かったため、楽しく活動することができました。

鈴木玄太

当初は軽い気持ちで取り組んでいましたが、何回もダメ出しされてやり直しました。「グローバル」とは何かを考えるとところから始まり、そこから静岡のグローバルを探して取材し、それを成果物として残す。これらの作業がここまでシビアなものだとは思いませんでした。半年間の活動をこうやって形にできた今、感無量です。

長島菜津子

『グローバルな静岡』というテーマは私にとって難しいものでした。近年よく耳にする『グローバル』ではなく、初めて聞いた『グローバル』。最初は戸惑いもあり、本当に見つけられるのだろうかと不安になりました。しかし、先生やメンバーの協力もあり、食を通じた『グローバルな静岡』を見つけることが出来ました。静岡と世界の繋がりを静岡県民をはじめとした多くの人々に知ってもらいたいです！

尾鷲菜那



2014年度、富士山静岡空港の外国人出入国者数が、地方管理空港の中で最も多く、全国ニュースでも取り上げられるなど注目を集めました。しかし、外国から静岡へ来てくださるということだけではなく、取材を通して少しずつ静岡から外国へ「人と人との関わり」を実感することでもできました。より多くの人に静岡の良さを知っていただければ幸いです。

藤永智貴



ぐるーかる静岡

2016 年 3 月 発行

編集 常葉大学外国語学部グローバルコミュニケーション学科 3 年

本誌はグローバルコミュニケーション学科正課内「協働研究セミナーⅡB」の成果物です。

ところでグローカルってどういう意味なの？

「グローバル」と「ローカル」の意味は知ってるよね？
グローカルとは、簡単に説明するとその二つを掛け合わせた言葉なんだ。
要するに「地球規模の視野で考え地域視点で行動すること」だよ。

わかるようでわからないような…つまりそれってどういうこと？

それを考えるのがこの授業の課題。ヒントをあげると、最近はグローカル企業なんていうものがある。
国際的に事業を展開している企業だけど、地域別の特性に合わせた経営をしているんだ。
ここまでいえばわかるかな？

なるほど。じゃあ私の考えるグローカルは…

グローカルの意味、わかってきたかな？
そうしたら、今度は静岡にあるグローカルを探しに行こう！

このようにして私たちは、「グローカル」について詳しく
調べて自分たちなりに考え、定義付けをしてから、静岡に
あるグローカルを探して取材してきました。



CONTENTS

静岡インターナショナルスクール

＜教員インタビュー＞・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

▽日本と母国を結ぶ未来のパイプ役

▽外国人と共に暮らすこと

▽日本語教師に映る「グローカル静岡」とは？

＜学生インタビュー＞・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

▽私たちを知って！～留学生の声～

▽「グローカル化の輸出」による真のグローカル化

静岡県警通訳センター・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8

警察から見える「グローカルしずおか」ー県警通訳センターの業務を通してー

レストラン・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10

▽タージマハル「カレーで繋ぐインドと静岡」

▽ナマステ「ネパール料理に見る味のグローカル化」

静岡県国際交流協会・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12

グローカルしずおかに貢献する国際交流の架け橋

私たちが考えるグローカル静岡・・・・・・・・・・ 13

編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16

編集者

- 1 班 -

尾鷲 菜那

岡村 純成

嶋津 英美

鈴木 一貴

藤永 智貴

渡邊 彩乃

- 2 班 -

鈴木 玄太

多々良 亜理沙

半田 美紀子

見原 明日香

山本 佳奈

- 3 班 -

芦川 智香

加藤 彩花

長島 菜津子

永谷 梨奈

中村 真子

牧野 紗也

松浦 祐希

丸尾 友哉

デザイン

長島 菜津子

日本と母国を結ぶ未来の

パイプ役

まず、日常の学校生活で学生と接する際に配慮する点について質問したところ、宗教の違いなど国籍ごとの特徴に気を配りながら生徒と共に成長していくプロセスを大切にしているとのこと。お二人の言葉には、学生一人ひとりの将来に少しでも役に立っていけることに幸せを感じ、さらに「この学校で学んだことが学生たち個々の人生の宝となってくれたら嬉しい」という思いが込められているように感じた。

次に「グローバル化」という意識や実情について尋ねたところ、「始めは意識していなかったが、言われてみれば、今まで自分たちがこの学校でやってきたこともグローバルだった」と、学生への教育例を挙げて回答してくれた。日本語を勉強しに来日しても、言語の勉強のみに限らず、周囲との関わりや交流も大切であると学生に教えているという。

しかし同時に、静岡という地元でのグローバル化に関する課題もお二人から挙げられた。例として、開催するイベントや交流会に興味を示してくれる方たちの年齢層が比較的高いことに触れ、今後は、外国人学生たちと同世代の日本人学生などの若年層と交流する機会をより増やしていく必要があるという。他国の同世代の仲間とコミュニケーションをとることは貴重な財産になり、互いに理解し合うと同時にその土地や人々に溶け込んでいくことが

グローバル化へ向けての大切な要素であると先生方は考えている。

外国人労働者を雇用している県内事業所数、労働者数は増加に転じており、事業所数と労働者数はそれぞれ全国で 7 番目、5 番目であるため、「日本の企業で働きたい、経験を積みたい」という同校の学生にとって静岡県という環境は有利な土地ではないかと思われる。

「将来、学生たちが日本語を使って仕事をし、日本と母国とのパイプ役になって欲しい」「日本を愛してくれる人を育てたい」という思いがインタビュー中のお二人の表情とお言葉から強く伝わってきた。

執筆者：（1 班）嶋津

外国人と共に暮らすこと

Q:社会交流活動の目的は何ですか？という質問に対して、「外部の人に学生が頑張っている姿を見てもらうことです。」また、「外部から交流活動の依頼はあるが、単発のため刺激にはなるけれども大きな影響は与えられていません。そのため深い交流ができていないのが現状です。」というお答えでした。交流活動の依頼に関しては、先生方が知る限りでは、「昔より今のほうが増えた。特に各国のことについて教えて欲しいという依頼が主です。」

次に、**Q:静岡の人たちは外国人を受け入れる態勢であるか、また外国人が暮しやすくするために地元の人が変化すべきと思う**

ことは何ですか？という質問に対して、「地域の方とそんなに関わりを持つことはないが、静岡インターナショナルスクールは昔からあるため、外国人と暮らすことを理解してくれていると思う。」とのご回答をいただきました。

さらに、**Q:外国人と日本人の共生に関する問題について、どのように感じているか？**という質問に対しては、「交流イベントがあっても関心を持ってくれている人たちは年齢層が高く、学生たちと同世代ではないため、小中高生にもっと交流する機会が増えればいいと思います。」また、「日本人は、あまり外国人をよく知らないことから、偏った見方をしてしまう場合もあります。一方で、日本人が外国人を受け入れる意識を強くするためには、外国人も日本のルールに従わなければならないし、その努力が必要であると思います。」といったようなご意見もいただきました。

最後に、**Q: 先生方が考える「グローバル化」とその影響とは？**という質問に対して、「お互いを理解していくことが大切で、地元の人が知りたいという需要があつてこそ溶け込むことができると思う。」グローバル化の影響に関しては、「外国人は日本語を勉強しに日本に来ているが、それだけでなく、近所付き合いも大切だということを教えています。日本人と外国人が共に暮らすためには、ルールを守ることが大事です。」と答えてくれました。

日本語を教える現場でご活躍される二人の「しずおかグローバル人」にお会いして、静岡におい

静岡 Shizuoka International School インターナショナルスクール	<教師インタビュー>	
	私たちは、静岡市の瀬名にある「静岡インターナショナルスクール」を訪問し、同校で日本語を教えるお二人の先生方にインタビューした。	
	お答えいただいたのは松岡みちる先生と安本直子先生である。	
	インタビュー実施日	平成 27 年 11 月 29 日(木)

	
松岡みちる先生	安本直子先生

でのグローバル化は、「今はまだ食い違いもあり、溶け込んだとは実感できない現状である。」また、「外国人が日本人以上にしっかり地域のルールを守って律儀に生活していれば、ローカルな静岡人はもっと彼らを受け入れてくれるのではないか。」というお話を聞き、お互いが共生していくためには、日本人だけではなく外国人も努力が必要であり、歩み寄ることが大切だ、と私たちも強く感じました。

執筆者：（2 班）見原



安本先生とインタビュー（半田・山本）

日本語教師に映る「グローバル静岡」とは？

最初に伺った質問は「**学生と接するうえで気をつけていること**」で、先生方は学生と接する際に授業などで宗教や政治などのタブーを避けることを心掛けているとのこと。授業で宗教や政治に関

わる繊細な話題に言及する場合にも、十分に配慮をしたうえで扱っているそうである。

次の質問は「**学生とどのように接しているのか**」で、これに対する回答は、生活面において、学生は親元を離れて異国である日本で暮らすことはとても心細いと感じるため、先生方や学校が彼らの拠り所となり、安心させる必要があり、大袈裟に言えば「親代わり」と呼べるほどのことをやっているという。

さらに、先生方に「**やりがいを感じる瞬間はいつか**」と聞くと、悩んでいる学生に寄り添い励まし合いながら生活し、日本を愛してくれていると感じた時にやりがいを感じるとおっしゃっていた。

卒業後、このような学生は、身につけた日本語を活かして、会社員や自動車整備士などの仕事に就いたり、さらには、日系企業での通訳や日本国内のレストラン関連の仕事などにも進出したりしている。

今回のテーマである「グローバル化」に関して質問したところ、グローバル化については、松岡先生は意識したことはなかったそう。松岡先生は岐阜のご出身で、静岡は岐阜よりも外国人に対し

てオープンで、今までにないグローバルの新しい道が見えたという。しかし、静岡のみならず日本では、外国人が税金を払って生活しているのに選挙権がないことなどの点は、本当のグローバル化ではないと、考えている。

この取材を通じて、私たちは「グローバル化」のあり方について、いろいろ考えさせられた。静岡が他県に比べグローバル化が進んでいるのではないかとすることも認識できた。2020 年の東京オリンピックが控えている中で、静岡のみならず、地方の「グローバル化」は、果たしてどのような方向に向かうべきなのだろうか。

最後にこの記事を作成する際にお世話になったお二人の先生に感謝申し上げます。

執筆者：（3 班）丸尾



松岡先生とインタビュー（丸尾）

私たちを知って！～留学生の声～

私たちの「しずおかグローバル化」の定義は、「皆が共に幅広い視野を持ち、外来者が新しい土地にとけこみ、地元在住者がとけこみやすい環境を作ること」です。つまり、外国人とこの土地の静岡人がお互い過ごしやすい環境を作る、ということです。

今回は、静岡市瀬名にある 1991 年 4 月に設立された静岡インターナショナルスクール（SINS）の学生さんたちに上記の点をふまえてインタビューを行いました。

同校に在学する一部の学生は、静岡に友人や家族がいたため静岡に来た人もいるそうです。

「静岡で困ったことは、ありませんか？」と聞いたところ、「バスの乗り方、買い物の仕方が分からない」「バイト先で日本人の話すスピードが早い」などの声が挙がりました。しかしそんな状況でもめげずに勉強など自分の将来のために努力している心優しい学生たちという印象を強く受けました。

卒業後は、日本でさらに大学へ通い自分が興味のある分野（観光学等）の勉強をしたり、専門学校で車の技術等を学び、自分の国へ帰って起業したりして、自国のために働きたいそうです。同校の進路状況を見ると、例年 90%以上が日本の大学や専門学校へ進学しています。

また、学生たちの話を聞くと、彼らは、見た目からか日本人に怖いと思われてしまったり、バイト先で優しくしてもらえなかったり様々な問題を抱えていることがわかりました。しかし、「東京等の都市部では、外国人が多いせいとか怖いと思われない。」という話を聞いた時、静岡の人はまだ外国人に対しての「免疫」があまりないと感じました。実際、静岡県は外国人が多い県として全国で第 8 位です。しかし、なぜこのような問題が起きてしまうのか？お互いが過ごしやすい環境を作るために私たちに今何ができるのか？しっかり考えて彼らの支えになればもっと住みやすい県になると思いました。

残念なことに、外国人をなかなか客観視できないで、つい無意識のうちに笑顔が消えて強張った表情で外国人を遠まわしに見てしまう静岡人も、まだいると言わざるを得ません。私たちのように大学の外国語学部でグローバルな視点を学ぶ者が、例えば、市や県の広報誌などに「留学生コーナー」の記事を掲載してもらい、生の留学生の姿を知ってもらうように働きかけたり、また、高齢者や子供たちに対して、回覧板などで身近に住んでいる外国人等の紹介欄を設け、お互いコミュニケーションが取れるような環境を作るような努力をしたりすることが大切だと思います。笑顔は一方的に作られるものではなく、双方から無理なく自然に出るもの。国籍を超えて、人と人が「共生」するための原則です。

今回の取材を通して、まずお互いを日常的に知る小さな工夫から始めることが、「しずおかグローバル化」への第一歩だと、私たちは改めて認識をしました。

執筆者：（2 班）多々良

「グローバル化の輸出」による真のグローバル化

私たちは、「しずおかグローバル」というテーマを持って、静岡インターナショナルスクール(以下:SINS)取材訪問した。SINS ではベトナム、ミャンマー、中国、インドネシアなどアジアを中心とした国の学生約 120～180 人が 1 年半～2 年間の課程で日本語を学んでいる。

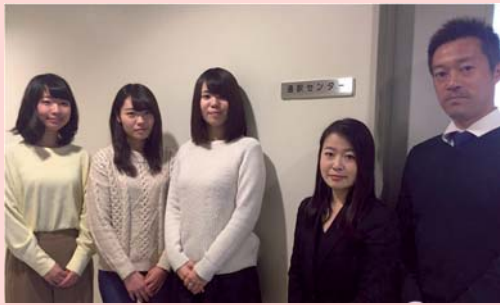
彼らは一体何故日本語を学んでいるのだろうか。ここで学んでいる多くの学生が卒業後は、大学や専門学校への進学を目指している。多くの学生が開発途上国か新興国の出身のため、日本の優れた技術を修得し、自国に持ち帰るために日本語を学んでいると話した。多数の生徒が、自国に比べて日系企業は給料が高いから就職したいと話した。調べてみると、例えばベトナム企業の平均所得はエンジニアでさえも 1 カ月 400～500 ドル（1 ドル＝120 円換算で約 4 万 8 千～6 万円）。日系企業だと 1 カ月 1000 ドル（1 ドル＝120 円換算で約 12 万円）。また、IT 関連の業種では日本語が話せるベトナム人が少ないようだ。JETRO の報告によると、労働賃金の低い 15 か国を調査した結果、ベトナムは第 4 位と評価された。ベトナムの経済状況を見ると、ベトナムにおける日系企業の 66.1%は経営活動を拡大する予定で、この比率は他の国と比べて高い。こういったことから日本語の重要性がわかる。

インドネシア出身のイクバルさんは「日本企業のほうが給料が良く、技術がすごい。特に船の技術がすごく、自国に持って帰りたい。」と熱く夢を語った。こういった海外の若者が日本の技術を持ち帰り、自国で広めていく。このように、「自国と日本を繋ぎ、日本をよく知った上で海外で活躍すること」が「グローバル化の輸出」とも言えるのではないかな。さらに、これこそが真の「グローバル化」とも言えよう。今回の取材を通じて、「しずおかグローバル」を見つめた結果、私たちが感じたことである。

執筆者：（3 班）芦川

↓→SINS の皆さんと





右から「通訳センター」の安本様・山本様。

そして取材した牧野・松浦・中村の3名

3 班

私たちの班では「グローバルしずおか」をテーマとした取材として、
静岡県内で発生する外国人が関わる事件や相談において通訳業務に当たる
警察のお二人の方にお話しし、日常の業務を通して見たり感じたりしている
「グローバル化」の様子をお伺いすることにしました。

取材日：平成 28 年 1 月 19 日（火）

取材場所：静岡県警察本部・警務部・教養課「通訳センター」（静岡市清水区）

ご対応していただいた方： 巡査長・静岡県巡査 安本竜二 様
警察行政職員・通訳センター主任 山本知香 様

取材者：牧野沙也、松浦祐希、中村真子（GC 学科 3 年生）

警察から見える「グローバルしずおか」 ー県警通訳センターの業務を通してー

当日の質問事項とお二人からのご回答を、以下にまとめてみました。

Q：静岡県で発生する事件・事故の傾向はどのようなものですか？

A：外国人犯罪について申しますと、窃盗やオーバーステイ、暴行事件が多いです。

Q：この国籍の人の事件・事故件数が多いですか？

A：やはり静岡にはブラジル国籍の人が多いためブラジル人が多いです。続いてベトナム人、次に中国、フィリピン、韓国です。

Q：国籍の違いによって事件・事故の性質に違いはありますか？

A：あります。例えば韓国系は風俗、違法マッサージが多いです。英語圏は、例えば、観光で富士登山に訪れた方が道に迷ってしまうなどの通報が多いです。ブラジル人が関わる事件等については、窃盗や万引き、違法薬物やドラッグが多いです。

Q：生活相談を受ける際は、どのような相談を多く受けませんか？また、その相談に対してはどのようなアドバイスをしていますか？

A：私（安本）が磐田署に勤務していた頃の体験談ですが、工場で働いている方が多いため、仕事上で日本人の上司とのトラブルの相談を受けたことがあります。言語面というより、仕事に対する考え方の違いが原因になるトラブルでした。あとは、違う国籍同士の夫婦や恋人間でのトラブルのご相談も受けていました。

Q：県警における全ての部署の通訳を担当しているのですか？

A：私（安本）が磐田署に勤務していた頃の体験談ですが、工場で働いている方が多いため、仕事上で日本人の上司とのトラブルの相談を受けたことがあります。言語面というより、仕事に対する考え方の違いが原因になるトラブルでした。あとは、違う国籍同士の夫婦や恋人間でのトラブルのご相談も受けていました。

A2：外国人に日本で孤立してほしくないです。彼らと互いに関わり合って、地域での活動や趣味などを通して日常的に接することが大事だと思います。皆さんの大学での学びや（学科で専攻した）スキルという特別な力を活用して、自ら外国人に近づいていくこと、しかも、仕事上でも、仕事以外の所でも、それをライフワークとして行動することが大切だと思います。

Q：この取材では「グローバル化」、「静岡のグローバル化」をテーマにインタビューを行っていますが、皆様がお仕事を通じて感じている「静岡のグローバル化」とは、どのようなものでしょうか？

A1：県内の「外国人受入れ」という意味でのグローバル化は、この10年で進んでいます。空港と富士山（観光）によって、静岡に来るリピーターの方が増えていると聞いています。東京のような都会でなく、静かな地方都市で日本人の日常生活を見たいという方がいて、東京オリンピックに向けて、このようなリピーターが増える可能性があります。また、磐田市のように、外国人のコミュニティができている地域では、日本人の日常との接点が普通になっています。そういった「ゆったしさの中の国際化」が、静岡のグローバル化の特長だと思います。

A2：静岡県は外国人が多い県です。最近では一つの事件で複数の国籍の人が関わる事例も増えているように感じます。今後は訪問者の増加だけでなく多国籍化も進むと思います。そして国籍が多様化することによって国際結婚なども増え、静岡のグローバル化もさらに進むと思います。

A：基本的にはそうです。通訳センターでは英語、中国語、ポルトガル語、スペイン語、韓国語、ベトナム語の6言語を担当しています。通訳について、まずは、各警察署等にいる警察職員の通訳が対応し、しかしその対応が無理である場合は、通訳センター員での対応、それも都合がつかない場合は、民間の人に要請をして通訳してもらいます。

Q：なぜ教ある通訳の仕事の中で、この警察署通訳センターの仕事を選んだのですか？

A：通訳になるためにこの仕事を選んだのではなく、もともととは警察という仕事に魅力を感じて警察に入りました。日本に住んでいる外国人は、文化の違いから、警察に対して「怖い、関わりたくない」といったイメージを持っている、困ったときに警察を頼るという選択をしない方が多くいます。私は、「日本の警察はもっと市民の身近にある」ということを知ってもらい、頼ってもらえる存在になりたいくて、警察での通訳の仕事を選びました。

A2：もともとブラジル系の銀行やブラジル人学校などで通訳をしていました。ブラジル人学校では、人を育てることにやりがいを感じ、警察の仕事も自分の特技のポルトガル語を活かすことができ、やり甲斐もあることから、この仕事を選びました。

Q：この仕事に就くためには、どのような資格や学歴が必要ですか？

A：外国語を専攻する学部・学科を必ず出なくてはいけないわけではありません。TOEICや語学検定で一定の水準があるほうが好ましいと思います。しかし、警察官としての職務能力がまず備わったうえで通訳なので、警察学校での勉強や訓練を受けてからこの職務に就きます。その



安本様にお話を伺っている牧野・松浦

Q：静岡に住む外国人の生活上の悩み・問題、あるいは外国人が関わる事件・犯罪を防ぐために、一般の私たちが心掛けるべき点、気をつけるべき点はどのようなものでしょうか？

A：外国人との距離が近くなれば良いと思います。皆さんが、外国語ができるということは大きな武器になると良く

いろいろなお話しを伺っているうちに、アツという間に予定時間の30分を超過してしまいました。今回の取材を通して私たちが痛感したのは、「警察官の立場で通訳として被害者と加害者の間に入って事情を聴く」という場面では、両者の意見を中立的に正しく伝える必要がある。中でも、日本語だけでなく、多言語が飛び交う状況で通訳するということになれば、語学力はもちろん、相手の立場に立って話を聞く力も大事である。」という点でした。

私たちの住む静岡の「グローバル化」とは、もはや決して特別な状況ではなく、私たちの身の回りの日常において、外国の人と地元の人が日々繋がることだと思います。外国人を「異質な人」として距離を置いて見るのではなく、彼らの土地や文化などにも目を向けつつ一緒に生活を分かち合う積極性が、今後の「グローバルしずおか」に求められているのだ、ということが、お二人のお話しを伺ってよく分かりました。さらに、私たちのような外国語学部 GC 学科で学ぶ者が、現在および将来にわたって関わるべき「静岡のグローバル」の方向性も、お二人のお言葉の中に示されていたように思います。

最後ではありますが、安本様と山本様には、お忙しい中でお時間をいただき、大変有益な取材をさせていただきました。ここに、心からお礼を申し上げます。

執筆者：（3 班）牧野紗也

2015/12/18

静岡市葵区沓谷にあるインドカレー専門店『タージマハール』。夜道でも目立つインドの国旗を模した大きい看板と、お店に入りやすいようにと写真がついたメニューが目印だ。外観は、白を基調としたおしゃれなカフェという印象を抱く。とてもインドカレー料理店とは思えないが、お店に入ると「いらっしやいませー!」という明るい声と笑顔。同時にインドカレーのスパイスが鼻をくすぐり、置かれているインドの小物や絵画が目飛び込んでくる。内装の色合いを気にしたのか、日本人が好む観葉植物や葉っぱを模した飾りなどを店内の所々に飾っており、好感が持てた。外観と内観のギャップを感じるアットホームな空間のお店である。

メニューは、日本のレストランと変わりなく、漢字とカタカナ、平仮名で表記され、注文しやすいように何十種類ものカレーが種類別に分かれている日本のお客さん目線に立って考えられているものである。

おすすめのメニューは、『ディナーセット』である。自分で選べる二種類のカレーと自家製のナン、サラダ、二種類のチキン、サフランライス、インドのデザートやドリンクを全て楽しむことができる。『多くの料理を味わえる十満腹感を感じる』セットで、ディナーとしては非常に懐に優しい値段で提供してくれる。

ウェイターのアナンダさんはインド料理の名称やその意味を理解していないお客さんに対しても、丁寧にひとつひとつ料理の説明を流暢な日本語で教えてくれる。料理は勿論だが、彼のこうした姿勢にも日本とインドの結びつきを感じ、非常に好感が持てる。そんな心優しい彼が日本人のお客さんのことを「親切で優しく、挨拶がしつかりしている」と称賛した。料理を注文する際には「すみません」「お願いします」。料理を運んできた際には「ありがとうございます」「お願います」。料理を終え、店を出る際には「ごちそうさまでした」「美味しかったです」など、日本の文化の良さを日本人の何気ない態度

日本にネパール料理を広めたい。ネパールにいた時は全くと言っていいほど日本のことを知らなかったという店長のゴダラ・サンジープさん。静岡駅から北へ向かい徒歩7分、ネパール・インド料理、ナマステ。比較の見つけにくい立地だが、家族連れや学生、市役所の職員や銀行員など、幅広い職業や年齢層の訪れる人気料理店だ。サンジープさんが日本へ来て開業をしたきっかけは、奥様のサリタさん。まず彼女が日本語を学ぶため来日した。そしてネパールで料理人をしていた旦那様のサンジープさん呼び寄せ、日本で料理店を始めた。静岡県は日本のちょうど真ん中であり、自然も豊かで穏やかである。浜松に日本語学校があったこともあり、出店の際に静岡県を選んだ。静岡県の中でも一番静岡市が栄えているため、ここにお店をつくることを決めた。

出店する際に気をつけたことは山のようにあったという。日本人はネパールの味が好きだという話を聞いていた。そのため、味に敏感である日本人には本場の味と違うとがっかりされてしまうことが多々あった。日本人はネパールの味も好きだけれど甘口が好きという特徴もある。本場の味をそのまま再現しても多くの人には受け入れられない。試行錯誤した結果、日本人が好む味、つまり甘口を取り入れながらネパール料理の基本を変えることはせず提供するようになった。そうすることにより、より多くの日本人に受け入れられるようになったと話してくれた。ネパール料理は、インド料理、中華料理、チベット料理が融合されている。インド料理に良く似ているがインド料理ほど香辛料が強すぎず、野菜が比較的多く、日本人の口に合いやすいのが特徴である。

ネパールは年間を通して日本よりも気温が高い。南アジアや中南米など暑さの厳しい国では、スパイスを多用した料理が多く食べられる。理由として、辛い料理には発汗作用があり、辛いものを食べると汗が出ると、汗が体温を奪い蒸発することで涼しくなるということ。そして、香辛料の風味などには食欲増進や消化促進などの効果

ネパール料理に見る味のグローバル化 1 班 カレーでつなぐインドと静岡

や発言でも感じ、改めて日本に来てよかったと思うという。

「インド(料理)の味を味わってもらいたい」店長のバスネット・キムさんはそう語った。静岡は人が温かくて、海や山などの自然も豊かで良いところだと思い、自分の料理を食べてもらいたい、インド料理をもっと知ってもらいたい一心でタージマハールを開店。スパイスに慣れていない日本人にとって、インド料理をそのまま味わってもらうのは難しいと感じ、スパイスの調整や具材を変えて甘みの出るカレーにするなど、インド料理の良さを残しつつ、日本人の味覚に歩み寄ったカレーを作り上げた。

日本の良さ、静岡の良さを知ったからこそ、今度は自国インドの良さをカレーで知ってもらいたい。その一心で美味しいカレーを提供している『タージマハール』。日本をよく知る『グローバル静岡な』インドのシェフが作り、私たちの食文化に歩み寄ったカレーを、ぜひ味わってほしい。

執筆者：(1班) 尾鷲



があることや、保存性を高めることにも役立つからである。しかし日本はネパールよりも平均気温は低く、暑さが厳しい国でもない。だから辛口のを食べる習慣が少ないというわけである。食文化には気候・風土などの地域性も大きく関係しているということがここから分かる。

食材にもこだわりがある。東京のハラルフードの専門店からネパールの食材やスパイスなどを取り寄せている。ハラルフードとは、イスラム教の戒律にのっとった食べ物のことである。イスラム教徒以外でも食べることは可能であり、きちんと管理をされている点では、安全な食べ物とも言える。そして、スパイスなど「本物」の食材をまとめて調達するためには東京の専門店から仕入れる必要があり、静岡の食材は一切使わない。ここにも、日本にネパール料理を広めたいという信念が強く感じられた。

駐日ネパール大使特別講演会が常葉大学瀬名キャンパスで4月に開催され、その翌日にはネパール大地震が起こり、学内だけでなく日本中でネパールという国に注目が高まった今年。よりネパールを身近に感じた年だった。そして、私たちもこの取材を通して、より多くの人にネパール料理を食べてもらいたいと強く思うようになった。



奥様のサリタさんは「みなさん、お店に来てくれてありがとうございます。ネパール料理にはカレーやナン以外にもたくさんのおいしいものがあります。ぜひ多くの方に知って欲しいです。」そう笑顔で語ってくれた。

執筆者：(1班) 藤永



これまで「静岡インターナショナルスクール」での2回の取材を通して、静岡が私たちの定義する「グローバルしずおか」に近づくためには、外国人との日常的な交流が必要であることに気づきました。それを踏まえ、私たちは『公益財団法人静岡県国際交流協会』で総務課長を務めていらっしゃる加山勤子（かやま・いそこ）さんにインタビューをお願いし、静岡での国際交流に日々携わっている方から、いろいろお話しをお伺いすることにしました。

静岡県国際交流協会は平成元年から活動しており、主に①静岡県民の国際交流活動を支援する活動、②外国人住民相談窓口の開設や日本語支援などの多文化共生社会を推進する事業を行っています。今回インタビューさせていただいた加山さんは、民間企業を経て、現在静岡県国際交流協会に勤務しています。主な業務は、NPOや大学生等と協力し、地域に住む外国人と講座やワークショップ等を開催するアース（明日）カレッジ（国際理解教育）事業や、外国人住民相談員に関わる専門家との体制づくりを目指し、連携や研修を行う外国人支援事業を担当しています。

執筆者：（2班） 半田・山本・見原

◎Q&A（今回のインタビューの概要は以下の通りです。）

Q1：外国人と交流をするイベントを通して、日本人の意識に変化がありましたか？

A1：イベント終了後にアンケートを実施した結果、外国人が同じ地域や身近にいることがわかり、近くにいるのなら交流を続けていきたいという意見があった。イベントを通してこのような意識の変化が見られ、それ自体は良いこと。しかし、テレビや新聞などで外国人について知り、頭ではわかっている、実際に外国人と一緒に生活していくことは大変なことが多い。外国人がゴミ出しのルールを守らないことや、夜まで騒がしいことに対して不満があるが、言葉が通じないためコミュニケーションがとれない現状もある。日本語がわからないため、外国人には回覧板を回す家々から外す自治会もあるなど、情報を共有できない上に、外国人も日本人がどう思っているのかわからないという問題が実際に発生している。外国人が日本で働いている背景を地域に住む日本人が知り、外国人が地域や社会の一員として、ともに日本の経済を支えているということを理解し、その上で思いやりをもつてコミュニケーションをとるよう意識してもらえたらと思う。

Q2：静岡県民（主に大学生）が外国人に対して理解や関心があると思いますか？

A2：若い世代は「アース（明日）カレッジ」などのイベントを開くとサークルなどで参加してくれるが、大学を卒業してしまつと、忙しさや余裕がないことから参加できなくなったり、関心自体が薄くなつてしまつたりする傾向がある。通訳として外国語を専攻している学生の協力も必要な場合が頻繁に

あり、常葉大学からはスペイン語の学生さんが、過去に協力してくれたこともあった。

◎取材後の感想・意見

私たちは今まで外国人が日本で過ごしやすくなるためには、日本人と外国人がもっともつと交流すべきだと考えていました。しかしそれは方法の1つでしかないことが、加山さんのお話しを聞いてわかりました。交流をすることで外国人と日本人の壁や偏見などがなくなることも大事ですが、生活するうえでことばの違いや子育て、医療、離婚問題など、様々な問題を外国人は抱えており、それは静岡に住む外国人に限らず日本中で言えることだと思います。私たちグローバルコミュニケーション学科における言語や日本語教育などの学びは、このような問題で困っている外国人を助ける手段にもなると思います。今後静岡が本格的にグローバル化していくためにも、グローバルコミュニケーション学科の学生が、「グローバルしずおか」に貢献する国際交流の架け橋」になりたいと思いました。



私たちが考える「静岡のグローバル化」

（平成28年2月） 協働研究ⅡB・最終レポートから抜粋、一部編集

最後に、半年間この「協働研究セミナーⅡB」という授業に取り組んできた私たちが考える「静岡のグローバル（化）」について、それぞれの意見を並べました。この本を読んでいる皆さんが「グローバル」という言葉を身近に感じ、「静岡のグローバル化」について考えていただけるきっかけになれば幸いです。

グローバルというのは地域に根付いた外国人コミュニティだと思います。外国人でも住みやすい静岡には近年では富士登山の観光客も増え外国人の出入りが増えています。そういった中で根付いた外国人コミュニティは日本人との境が大きいような気がします。日本人が外国人を受け入れ、歩み寄っていったら静岡のグローバル化はもっといいものになると思います。

現在、静岡から全国へ、または世界への発信が増えており、静岡県のグローバル化は進んでいると考える。しかしグローバル化と一言にまとめても、例えばファーストフード店のグローバル化とは少し異なった、“想い”が込められているのではないか。例えば「ドリップ式お茶」の商品を開発した静岡県のある会社は、どうすれば静岡県が誇れるお茶が外国人の方により親しまれるかと、元から海外でも人気であるお茶をさらに親しみやすく改良し、そこから私はお茶及び外国人の方へ対する想いを強く感じとった。このように、静岡県のグローバル化には特色があると考え。

特定の場所である静岡で静岡以外の他文化と静岡の文化が混ざり合った新たな文化。

振り返ってみると、私はまだまだ『箱』の中に入っていたのだと思い知らされました。『グローバル』という聞いたこともない言葉から広がった『グローバル静岡』という新しい地元の見方、改革、新しい世界観。20年以上住んでいながらも、まだまだ知らないことがある静岡のことを知る良いきっかけになり、そして2国（2つの地域）の橋渡しの存在を今回調査することが出来て、より静岡が好きになり、考える機会が増えました。今度は自分が住んでいる街で『グローバル静岡』を見つけていきたいと思っています。

私は当初日本人も日本に住む外国人もお互い理解があり、ともに過ごしやすい環境になっていくことが「グローバル化」であると思っていた。その考えはこの授業を経ても変わることなく同じだが、当初よりさらに「グローバル化」について深く理解することができたと思う。そこに至るまでには多くの問題、課題があった。まず日本人が外国人に対してまだ不慣れで、偏見を持っているという事。頭の中では同じ人間なのだから外国人に対して偏見を持つてはいけないとわかってはいるもののどこか下に見てしまったり、恐怖を感じたりしている現状があり、そこからいじめや、距離を置かれたり居心地の悪い環境になってしまっている。そして日本の社会がまだ外国人を受け入れられる状態ではないという事。医療、学校、法律、さまざまなことで言語というものは必要不可欠である。その中で日本語が主な日本では英語もあまり通じず、何を言っているかもわからず生活している状態がとても過ごしやすい状態とは言えない。これらのことを、取材を経て知ることが出来た。そしてそれらから私達GC学科の学生がそんな静岡の現状を変えることが出来る存在になれると思う。理解をしているだけでも少しずつ「グローバル化」になる。この授業を経て、GC学科の学生が社会にどんな活躍ができるのか改めて考えるきっかけになった。

「静岡のグローカル化」としてまず貿易が挙げられると考える。例えば、静岡は車の部品や楽器などを製造している大きな会社がある。ここで作られる製品が海外でも使われていたり、出稼ぎに来た人たちが日本の製造技術などを学び自国に伝え、それを活かして各国の特色に合わせた製品を造ることがグローカル化であると考えている。また、今回警察署での取材を通して貿易だけでなく人の交流の中にもグローカルが存在すると感じた。国によって警察に対する価値観が違うため、外国人が日本の警察と接することで自国の警察の在り方を見直すきっかけにも繋がるし、通訳の仕事を通して通訳をしている方もされている外国人もお互いに喜びを感じることができるのでこういった交流から生まれるグローカルもあるのだと感じた。

私の考える「グローカル」とはただ利益や普及を考えて自らの文化を広めるのではなく、その土地の人たちの生活や特徴を考慮して変化・工夫をしながら両者の利益とすること。このように私は考える。

「地球規模で考えながら、自分の地域で活動する」ことであると考えている。私たちは企業を例えとし、富士山静岡空港などをグローカル企業であると考えた。

普段あまり意識していないところにも当たり前のようにグローカルは存在したのだなと感じました。私が考える静岡のグローカル化とは、静岡がもっと海外とのやりとりを盛んにすることだと思います。そうすることにより、より多くの海外の方とのふれあいが出来る機会を設けることが出来ます。つまり、静岡から海外への輸入輸出を多くし、向こうの文化を取り入れたり、静岡の文化を向こうにも取り入れてもらったりすることです。

静岡のグローカル化とは、これまで外側（県外、または外国）に向けられていた物事の発信先の視点を静岡へと向けなおすことだと私は考えた。

簡単に言えば静岡と外国を繋げること。物、言葉、文化などを通して繋げる。しかしそれは人と人があって成立するものだと思う。私たちが班別企画で考えた食を通して外国の文化を知る、ということもその国の人があつて、その方達が日本にやってきて食を広めた。さらに、外国のものをそのまま広げるのではなく、ここ静岡、地域に根付く形に変えて広めることで静岡独自のグローカル化、差別化されたグローカル化が出来上がるのだと私は考える。

私が考える「静岡のグローカル化」とは、静岡の優れた技術を海外に発信していくだけでなく、その後もその国と関係をもつて、お互いを高めあっていくことであると思う。

外国人も静岡人も、お互いが尊重しあい共に生活していく。相手を理解し、理解される立場になる。そして、地域内もそうですが、イベントなどに積極的参加し外個人ともしっかりと関わりを持つことが静岡のグローカル化であると考えます。

私がこの活動を通じて考えるグローカルとは、外国の方が生活しているその地域に溶け込めていることだと思う。最近私は外国人がいるとグローカルという言葉が少し頭に浮かぶのだが、正直道で自転車をこいでいる外国人でさえグローカルという言葉は当てはまると思う。授業ではグローカルについて深く、難しく考えていたが想像より身近にあることばではないかと思う。そして身近にあるからこそグローカルといえるのではないかと考えるようになった。

静岡のグローカル化とは、静岡で日本語や様々な技術や文化を自国にもちかえり、静岡と自国の架け橋になることだと考える。そして、自国に帰って終わりではなく、その後も何らかの形で静岡と関わりをもっていくことだと私は考える。

「静岡グローカル化」とは、その地域に溶け込みやすい環境をつくる。ということで、そのためには、何をすべきなのかを私たちは考えてきました。その結果、「外国人もその地域に住んでいる日本人も互いに歩み寄る」ということが大切だと思いました。その地域に溶け込むためには、その地域のルールをちゃんと守ったり、新しい情報をお互いに交換したりすることが必要です。静岡はまだその段階ができてないと感じました。しかし、静岡空港ができたことにより、外国人観光客の対応にとっても力を入れていると思います。環境が整いつつあるので、静岡はこれから先どんどん変わっていくなと思いました。

「グローカル化」とは、「お互いがお互いのことを知り、尊重し合い、共に生きていくこと」だと考える。もし、近所に外国人が引っ越して来たら、その国のことを調べてみたり、挨拶から始めてみたりする。外国人も、日本の文化等を知って、それになるべく合わせる努力をするといったことが大事になってくるのではないかと思う。私たちの班が考えた最初の定義では、日本人ばかりが外国人に対して努力をしなければならないようなとらえ方だったと感じる。そうではなく、外国人も日本に合わせる努力が必要で、それ以上に日本人が「今の日本があるのは誰のおかげなのか」ということを理解し、差別なく接することで、「グローカル化」していくと感じた。

私の考える「静岡のグローカル化」とは、ある国と静岡の双方に利益、展望がみられる関係である。私たちの班の記事作成が料理に関するものであった事もあり、料理の観点からのグローカル化の理解となった。異なる国の料理を日本で出店するにあたって、いくつもの試行錯誤が行われていた。その国本来の料理の特徴を残しつつ、日本人でも楽しめるような味付けも目指す。そこで日本人の料理に対する好みや趣向を調べ、理解する。日本人客とのコミュニケーションを積極的に、大切にしていく。この静岡という土地の良さを感じながら料理を提供していく。仕事をしていく中で静岡の人の良さを発見する。これらすべてが「静岡のグローカル化」ではないかと感じた。

「グローカルとはなにか」。非常に難しい題であると感じました。最近ではグローバル化という言葉聞くことが多くなり、逆にグローカルという言葉はあまりなじみがありませんでした。そのため、イメージがしにくく、真っ白な状態でした。外国人の学生や通訳業をしている警察の方々とのインタビューを通し、グローカル化とは「人と地域のつながり」であると感じました。グローバル化とはひとりの人間やモノが世界へ目を向け、世界へ発信されることだと考えます。ではグローカル化とはなにか。グローカル化とはひとりの人間やモノが世界のある地域に目を向け、自分から受け入れ、自分に取り込むことだと考えます。まさに「人と地域のつながり」だと考えます。